様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０２６９

研究課題名（和文）イングランド宗教改革期の好古家の活動と英文学史創出の試みに関する考察

研究課題名（英文）A Study on the Literary Activities of Tudor Antiquaries and the Creation of a National Literary Tradition in Reformation England

研究代表者
小林　宜子（KOBAYASHI, Yoshiko）

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：８０３０２８１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、イングランド国王ヘンリー八世の忠臣であった人文主義者ジョン・リーランド、および彼と親交のあった宗教改革期の複数の好古家の文学的活動に焦点を絞り、彼らが試みた国民文学の伝統の創出とカノン形成の企てを考察したものである。また、彼らの活動の根底にあった国民主義的な人文主義の思想がエリザベス朝の詩人たちを経てトマス・ウォートンの『英詩史』へと継承されていった過程を辿ることにより、宗教改革期から18世紀後半に至るまで連綿と受け継がれることになった英文学史観の批判的な再検証を試みた。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the literary activities of John Leland and three other Tudor antiquaries who were engaged in the creation of a national literary tradition and the formation of a literary canon in the face of a massive historical change that threatened to obliterate England’s literary heritage in the age of Reformation. Through a critical analysis of the nationalistic humanism that lay at the heart of their literary enterprises, this study also reassesses the vision of English literary history that first took shape in Leland’s bio-bibliographical work and persisted through the Elizabethan era into the later decades of the eighteenth century, which saw the publication of Thomas Warton's "History of English Poetry."

研究分野：人文学

キーワード：初期近代英文学　テューダー朝　宗教改革　好古家　人文主義　ナショナル・アイデンティティ　ルネサンス　中世英詩

１．研究開始当初の背景

従来の英文学史の叙述では、テューダー朝が始まる 1485 年を中世の終焉と定め、16 世紀後半のエリザベス一世の時代をルネサンス期と呼ぶことが一般的であった。しかし、中世がいつ終焉を迎えたかについては様々な異論があり、「ルネサンス文学」という名称の妥当性をめぐっても議論は尽きない。近年ではむしろ「ルネサンス文学」という名称を避け、「初期近代文学」や「宗教改革期の文学」といった名称を好んで用いる傾向がある。「中世」と「ルネサンス」の時代区分、および各々の概念をめぐる再検証の動きは、文学研究のみならず、歴史、思想史、美術史、書物史の分野でも見られる現象であり、2012 年 6 月に開催された西洋中世学会第 4 回大会では、そうした問題意識に支えられて「中世とルネサンス――継続 / 断絶」と題するシンポジウムが行われた。研究代表者はこのシンポジウムに参加し、英文学史上、「中世」から「ルネサンス」への移行期として位置づけられてきた 1530~40 年代に焦点を絞り、この時代に重要な著作を残した四人の好古家（ジョン・リーランド、ジョン・ベイル、ブライアン・テューク、ウィリアム・シン）によって「現在」と「過去」の関係がどのように認識されていたのかについて試論を発表した。

1530~40 年代は、ヘンリー八世治下でローマ教会からの分離独立が断行された時期であり、一連の宗教改革の中でもとりわけ 1536 年以降に開始された修道院解散は、修道院建物の破壊とその付属図書館に所蔵された多くの書物の喪失と散逸を招いた点で、過去との訣別を強烈に印象づける出来事であった。上記の四人はいずれも国王の政策への明確な支持を表明し、「迷信」と「誤謬」に満ちた過去との断絶を強調したが、その一方で、宗教改革後の国家の威信を支えるものがブリテン島で独自に育まれた文芸の系譜のうちに見出されることを確信し、そうした伝統の存在を国内外に示すことを急務と考えた。フランスのユマニストと親交のあったリーランドは、上告禁止法が発布された 1533 年以降、散逸の危機に晒されたイングランドとウェールズ各地の修道院蔵書の綿密な調査を行い、『著名人伝』(*De uiris illustribus*)の執筆を通じて、ローマン・ブリテンの時代から 15 世紀の人文主義者たちへと連なるイングランド固有の「雄弁 eloquence」の伝統の再発見に努めた。14 世紀の英詩人ジェフリー・チョーサーの真作を収めた写本の発掘に尽力したシンとテュークは、1532 年にチョーサーの作品集を出版し、次世代に継承すべき俗語詩の伝統の構築をめざした。他方、リーランドの後継者を自任したベイルは、国教会の熱烈な支持者として、宗教改革の先駆者と呼ぶにふさわしい 15 世紀以前の著述家たちの存在に光を投じた。シンポジウムでの報告は、これら四人の好古家の活動が各々目的は異なるものの、総じて記憶の浄化と新時代に残すべき過去の著作の選別を企図したものであったことを明らかにした。

本研究は、こうした考察を敷衍させる形で着想されたものである。

２．研究の目的

本研究はシンポジウムで発表した前述の試論を敷衍させ、リーランドの活動をより明確に考察の中心に位置づけながら、以下の三つの視点からこれを発展させるものとして構想された。

(1)　シンポジウムで主な考察対象として選んだリーランドの『著名人伝』を彼の著作全体の中で捉え直し、その意義を再検証した。さらに『著名人伝』の執筆構想の中に、イタリアの作家ペトラルカの同名の著作の影響が認められることから、リーランドと文学的交流があり、ペトラルカの俗語詩の翻訳者としても知られるトマス・ワイアットとヘンリー・ハワードの詩作活動と関連づけながら、ペトラルカの俗語およびラテン語の著作の1530~40 年代イングランドにおける受容について調査した。

(2)　シンポジウムの報告では、リーランドがセント・ポール校に通い、トマス・モアと親交のあったウィリアム・リリーのもとで人文主義の教育を受けたこと、またケンブリッジとオクスフォードの両大学で研鑽を積んだのち、1528 年に国王の奨学生としてパリに留学し、古典文学や文献学への関心を深めたことに言及した。本研究では、自国に根ざす「雄弁」の伝統を再発見しようとしたリーランドの試みを彼の個人的な経験のみに収斂させるのではなく、より広く 15 世紀前半から 16 世紀半ばまでのイングランドにおけるイタリア人文主義の受容という文化史的な文脈の中で捉え直した。その際、リーランドが『著名人伝』の中で称賛したウィリアム・グレイ、ジョン・フリー、ジョン・ティプトフトら、15 世紀の人文主義者の功績の再評価を試みた。

(3)　人文主義の影響下で古典文学への造詣を深めたリーランドが、ローマ教会からの分離独立という事態を受け、イングランド固有の文芸の系譜の再発見を通じて国家の威信を高めることを自らの任務と考えるに至ったことは、すでにシンポジウムの報告の中で指摘した。本研究では、リーランドの思想に見られる人文主義とナショナリズムの接近が、彼と親交のあった同時期の好古家にも共通して見られる特徴であること、そうした思想的傾向がエリザベス朝期の詩人フィリップ・シドニーやエドマンド・スペンサーにも受け継がれていることを明らかにした。さらに文芸史の創出がナショナル・アイデンティティの構築にとって不可欠であるとのリーランドの認識の重要性が 18 世紀にあらためて見直され、彼の著作の相次ぐ刊行を促したと同時に、英詩の最初の通史的な叙述であるトマス・ウォートンの『英詩史』(1774~81 年)に影響を与えたことを明らかにした。

３．研究の方法

　イングランド宗教改革期の好古家の活動と英文学史創出の試みに関して文化史的な観点から考察を行うために、前項で述べた三つの研究テーマのそれぞれに一年ずつを費やし、以下の方法で分析を進めた。

(1)　修道院図書館の蔵書調査を目的としてイングランド・ウェールズ各地を訪れたリーランドの旅の記録（*The Itinerary of John Leland*）を考察対象とし、宗教改革後のイングランドのアイデンティティを地理的・空間的に定義しようとした著作として評価した。そのうえで、ナショナル・アイデンティティの源泉を文芸史という観点から時間を遡りつつ探求した『著名人伝』との関係を捉え直した。また、『著名人伝』の執筆構想の中にペトラルカの同名の著作の影響が認められるため、

ペトラルカの人文主義的なラテン語の著作がヘンリー八世の宮廷でどのように受容されたかを調査した。

(2)　リーランドは『著名人伝』の中で、ローマン･ブリテンの時代から 15 世紀末まで連綿と受け継がれてきたラテン語によるイングランド固有の「雄弁」の伝統を辿っている。彼がその中で紹介した膨大な数の著述家の中から 15 世紀に活躍した人文主義者を選び出し、その活動を振り返りつつ､15 世紀前半から 16 世紀半ばまでのイングランドにおけるイタリア人文主義の受容について考察した。

(3)　リーランドの著作に見られる人文主義とナショナリズムの接近について分析し、そうした思想的傾向が彼と親交のあったジョン・ベイル、ブライアン・テューク、ウィリアム・シンの文学的活動にも認められることを明らかにしつつ、彼らが体現した国民主義的な人文主義の思想がエリザベス朝期の代表的な英詩人フィリップ・シドニーとエドマンド・スペンサーに継承され、さらには 18 世紀に至ってトマス・ウォートンによる国民文学の伝統創出の試みにつながった経緯を考察した。

４．研究成果

　ここでも、上記２．に記した三つのテーマに沿って、それぞれの研究成果を報告する。

(1)　2013 年度はジョン・リーランドが執筆した『著名人伝』に焦点を絞り、彼がその中でローマン･ブリテンの時代から 15 世紀末に至るまでのイングランド固有の「雄弁」の伝統の構築に努めたことを明らかにするとともに、彼のもうひとつの著作である『ジョン・リーランドの旅の記録』を考察対象に含め、イングランド文芸史の確立をめざした彼の取り組みが、イングランドのナショナル・アイデンティティを地理的・空間的な視座から再定義しようとした試みと連動するものであったことを明らかにした。と同時に、両著作に共通する特徴として､カトリック信仰の｢闇｣に閉ざされた過去との断絶と新時代の到来に対する強烈な意識が表現される一方で、歴史の連続性をめぐる感慨（これは『旅の記録』においては、とりわけイングランド各地の河川や橋をめぐる記述の中に看取される）や、伝統の保存と継承に重要な役割を演じた修道院や修道士たちへの複雑な共感（そうした共感は、修道院解散を含む一連の宗教改革へのリーランドの賛同と矛盾する可能性がある）を読み取ることができ、両者が緊張を孕みながら同じ著作の中に共存している様を確認した。

(2)　リーランドが『著名人伝』の中で紹介している 15 世紀イングランドの人文主義者たちの活動を振り返りながら、15 世紀前半から 16 世紀半ばまでのイングランドにおけるイタリア人文主義の受容について考察した。考察の第一の中心となったのは、ヘンリー六世の叔父にあたるグロスター公ハンフリー・オヴ・ランカスターが文芸の後援者として果たした役割である。グロスター公はイタリアから文法学者、文献学者、歴史家等、複数の知識人を招致して、イタリア人文主義のイングランドへの導入および定着に少なからず寄与したが、リーランドがそうしたグロスター公の面影をヘンリー八世の姿に重ね、文芸の庇

護者としての国王像の構築に努めていたことが 2014 年度の調査で明らかになった。また、リーランドが写本の蒐集家として知られるグロスター公の活動と、修道院解散が目前に迫る中で散逸の危機に晒された修道院蔵書の蒐集・保存に尽力した自らの活動との類似性を意識していたことも確認できた。2014 年度の考察の第二の中心となったのは、グロスター公が活躍した時代にイタリアのフェラーラに渡り、グアリーノ・ダ・ヴェローナに師事して古典を学んだウィリアム・グレイ、ジョン・フリー、ジョン・ティプトフトらの功績である。リーランドは、これら 15 世紀の人文主義者をイングランド古来の「雄弁」の伝統の中に明確に位置づけ、ジョン・コレット、ウィリアム・リリー、リチャード・ペイスといった 16 世紀の人文主義者へとつながる系譜の存在を強調した。リーランドの一連のラテン語による著作(『著名人伝』、『白鳥の歌 *Cygnea cantio*』、「文芸復興 *Instauratio bonarum literarum*」）は、15 世紀にイングランドに移植されたイタリア人文主義の伝統が、宗教改革という歴史の断絶を越えて着実に 16 世紀に継承され、イングランド国内で開花した過程を読者に強く印象づけるものであるが、そうした著作の分析を通じて、英文学研究の枠組の中ではとかく閑却されがちなイングランド国内のラテン語文学の伝統の重要性をあらためて認識する結果となった。

(3)　リーランドが『著名人伝』を著した主な目的は、イングランド国内で継承されてきたラテン語による「雄弁」の系譜を辿り直し、宗教改革後の国家の威信を支えるにふさわしい文芸の伝統の構築をめざすことにあった。だが、その中には例外的に 14 世紀の詩人ジェフリー・チョーサーとジョン・ガワーの英詩への称賛が含まれている。2015 年度はまずこの事実に着目し、そこに人文主義的な見地からの俗語文学再評価の動きの萌芽が認められることを明らかにした。そのうえで、リーランドと親交のあったジョン・ベイルによる作家評伝執筆（*Illustrium majoris Britanniae scriptorum*）、および同時代のウィリアム・シンとブライアン・テュークによるチョーサー作品集刊行の企ての中にも、同様に人文主義とナショナリズムの接近の跡が残されていることを明らかにした。次に、リーランドと同じく人文主義の教育を受けたエリザベス朝期の詩人フィリップ・シドニーの『詩の擁護』（*The Defence of Poesy*）とエドマンド・スペンサーの『羊飼いの暦』（*The Shepheardes Calender*）を考察の対象に加え、英語による「雄弁」の伝統の新たな創出がナショナル・アイデンティティの構築にとって必要不可欠であるとの認識がこれらの作品の根底にあること、そうした認識が、これらの詩人とリーランドとを結びつける思想的連続性の証左となっていることを明らかにした。最後に、18 世紀に入ってからリーランドの著作が相次いで刊行されるに至った経緯を調査し、18 世紀後半に出版されたトマス・ウォートンの『英詩史』（*The History of English Poetry*）の中にリーランドの文芸史観の影響が見られることを確認することによって、宗教改革期の国民主義的な人文主義の思想が後代に継承された過程の一端を明らかにすることができた。

以上の研究はすべて、従来の時代区分に基づく英文学史の枠組の中では看過される傾向にあった 15 世紀と 16 世紀、および 16 世紀前半とそれ以後の時代との様々な連続性を浮

き彫りにするものであった。とりわけ上記(2)で再評価を試みた 15 世紀の人文主義者はラテン語による著作のみが残されているため、英文学研究という領域の中では十分な考察がなされてきたとは言い難い。これまで時代間、学問領域間の狭間に埋もれていた著述家や著作にあらたな光を投じることができたという点に、本研究の重要な成果のひとつがあると考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

①小林宜子、「記憶の浄化と英文学史の創出――宗教改革期の好古家ジョン・リーランドをめぐる考察」、『西洋中世研究』、査読有、第 6 号、2014 年、pp. 51-70

〔学会発表〕（計 2 件）

①小林宜子、「John Gower のバラード――ライム・ロイヤルの詩学と政治学」、日本英文学会第 87 回大会、2015 年 5 月 23 日、立正大学品川キャンパス（東京都品川区）

②Yoshiko Kobayashi, “Letters of Old Age: The Advocacy of Peace in the Works of John Gower and Philippe de Mézières,” III International Congress of the John Gower Society, 1 July 2014,University of Rochester, Rochester, NY, USA.

〔図書〕（計 1 件）

①石塚久郎編、三修社、『イギリス文学入門』（小林宜子、第一部第一章「中英語文学」pp. 9–11, 13–17,「ウィリアム・ラングランド」「ジェフリー・チョーサー」「トマス・マロリー」pp. 22–27, 第二部「恋愛と結婚」pp. 372–373)、2014 年、453p.

６．研究組織

研究代表者

小林　宜子（KOBAYASHI, Yoshiko）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号： 80302818